

令和 6 年度 学校経営の改革方針

鈴鹿市立鈴西小学校

I 目指す学校像

(1) 学校教育目標

確かな学力と豊かな人間性をもち、たくましく生きる鈴西っ子の育成

(2) めざす学校像

夢と笑顔と緑がいっぱいの学校

保護者・地域の期待と信頼に応える学校

(3) めざす子ども像

自ら学ぶ子・・・学習に真剣に取り組み、ねばり強く考える子

心豊かな子・・・相手の立場を考え、心を通わせ、支え合う子

たくましい子・・・よい生活習慣を身に付け、心も体も元気な子

II 現状と課題

1 学力保障について

(1) 授業改革・授業研究

- ・児童アンケートの項目「授業はわかる」に、93.8%の児童が肯定的に答えていて、1目と2回目のアンケートでの差も見られない。
- ・保護者アンケートの項目「お子さんは学習内容を理解している。」のトップボックスがR4からR5にかけて3.1%減少している。
- ・児童アンケートの項目「授業中、進んで発表している。」が70%を下回っていると同時に、1学期から2学期にかけてトップボックスが0.2%減少している。
- ・学習規律を守る姿勢や積極性について、徹底されていない学年がみられる。学習規律及び習慣について見直し徹底を図る。
- ・みえSCの結果（国語・算数とも記述式問題の解答回答類型「9」が多い。）から、自分の考えを文章に表して伝える力に課題があることが分かった。自分の考えを文章等で効果的に伝え合う学習について、ICTの活用等授業改善に努める。

(2) 少人数指導

- ・基礎学力向上のため、算数科において3～5年生で配当時間の70%で習熟度別の少人数授業を実施する。

(3) 学習ボランティアの活用

- ・理科では、ボランティアの知識や技能を活かしていただき、子どもが興味を

もって学習に取り組むことができた。また、総合の時間や生活科で地域に出掛ける時に、子どもたちが安全に活動できるように見守っていただいた。今年度も継続し、子どもたちの意欲向上のみならず、経験の浅い教員の理科における指導力向上に活用する。

- ・学習・読み聞かせボランティアの活動がコロナ渦の流れで、実施が停滞している。地域に働きかけ、ボランティアを充実させる。

(4) 補充学習

- ・モジュール学習の活用が進み、授業と連動した補充的な学習にも有効利用できている。
- ・朝のモジュール学習にも縦割り班を取り入れ、自分で選んだ基礎・基本の学習課題へ取り組んだ。次第にさせられている課題から学びたい課題に変わってきた。
- ・対象者を絞ったサマースクールを2日間行い、基礎学力の定着を図った。

(5) キャリア教育

- ・系統立てた年間指導計画に位置付け、教科と関連させることができた
- ・サーチ学習で地元の産業である「お茶」を題材としたことで、地域のお茶づくりに関わる方を講師として招へいし、地域の再発見につながった。

(6) 読書活動

- ・朝の読書、読み聞かせ、おすすめ本20冊、読書週間、並行読書やふれあい読書などの取組により、1人平均50冊以上を読むことができた。
- ・「おすすめ本20冊」に全校児童が挑戦し、いろんなジャンルの本を読むことができた。
- ・児童アンケートにおける「本を読むことが好きである。」でトップボックスの割合は1学期から2学期にかけて1.7%減少しており、取り組みの改善が必要である。

(7) 家庭学習

- ・一、二学期に家庭学習強化週間を設け、10分×学年の学習時間を啓発しているが、学年が進むにつれ実行できる児童が減っている。
- ・三学期は「読書とメディア利用時間」に限定して強化週間を実施した。
- ・「家庭学習の手引き」を作成し各家庭に配付している。強化週間以外でも自主的に家庭学習の習慣が定着するように指導していく必要がある。

2 特別支援教育

- ・特別支援教育の視点を取り入れた授業（視覚的な教材・教具の工夫、教室環境への配慮、板書の工夫等）に取り組むとともに、支援が必要な児童に対して組織的な対応を行っている。
- ・毎月、校内委員会「児童理解会議」を開催し、児童理解に努めた。
- ・特別支援コーディネーターが中心となり、必要に応じて校内支援会議をもち（年間40回）、支援の在り方について協議したり、支援学級への転籍を勧めたりした。
- ・困り感のある児童や保護者を積極的に関係機関につなぎ、支援の方策につい

て共に考えていくことで、きめ細かい支援につなげている。

- ・中学校へ進学する児童と新入児童の支援会議を行い、保護者の安心感につながった。

3 人権教育

- ・児童の横のつながりが希薄なところがあり、自分たちでトラブルを解消する力が弱い。今後ともお互いのよさや違いに気づき、認め合い、高め合う態度を育成していく必要がある。
- ・様々な機会をとらえて互いの良いところを認め合うことの大切さを体感し、友達にやさしく接することができる児童を育成していきたい。
- ・人権集会などを児童会が中心になって行うことで、児童の積極性を養い、児童の中での人権意識の高まりを促したい。
- ・特別支援学級「ひまわり学級」への児童及び地域の偏見の実態がある。今後特別支援学級の正しい理解を進める取り組みを進めていきたい。

4 生徒指導

- ・児童会の「あいさつ運動」の取組も行われ、児童アンケート「友だちや先生、近所の人に自分からあいさつをしている。」のトップボックスは1学期から2学期にかけて1.3%上昇している。しかし、トップボックスの割合は73%にとどまっているので、子どもたちがさらに積極的にあいさつできるような取り組みを進めていきたい。
- ・様々なケアを行ってきたが、30日以上長期欠席が5名、10日以上欠席が25名（内30日以上長期欠席が5名）あった。今年度は、授業改善や自己肯定感を高める取り組みを行うことで、10日以上欠席者を15名以内にしていきたい。

5 安心・安全の取組

- ・通学距離が長く家もまばらで人通りも少なく、子どもたちの安全が心配される。
- ・登下校指導では、PTAや老人会、町づくり協議会を中心に、保護者・地域の方に協力していただいている。今年度も継続をお願いする。
- ・避難訓練、引き渡し訓練、交通安全訓練など、全校で取り組んだ。今年度は不審者対策の避難訓練についても実施していく。

6 開かれた学校づくり

- ・交通安全教室、運動会、マラソン大会などの行事では、地域・保護者が非常に協力的である。
- ・学校だよりなどで積極的に発信することで、保護者や地域の方々に学校での子どもたちの姿を共有でき、共に子どもを育てていくという意識が高まっている。（保護者アンケート「学校は、通信等で家庭への情報提供を積極的に行っている。」97%）

Ⅲ 中長期的な重点目標

【 学力保障 】

- ・Ⅱ 1（１）のとおり、学習の理解度に課題があることから、授業及び学習規律の改善に努め、基礎・基本の学力を身に着けるとともに、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。
- ・保護者アンケート「お子さんは、学校の宿題をきちんとしている。」のトップボックスが令和４年度から５年度にかけて、13.4％も減少している。宿題の大切さについて、地域や各家庭に啓発し宿題及び家庭学習の充実を図る。

【 人権教育 】

互いの違いを認め、他人を思いやる心を持ち、豊かな感性を身に付ける。

【 生徒指導 】

基本的な行動やきまりについて自ら考え、進んで実践しようとする。

【 健康、安心・安全 】

安全な教育環境に努めるとともに、自分の命は自分で守るという意識をもつ。

Ⅳ 本年度の行動計画

【 学力保障と向上 】

（１）授業改善と研修の充実

○基礎・基本の確実な定着を図り、個に応じたきめ細かな指導による個別最適な学習の実現を図る。また、教科学習でのグループ学習により対話的で深い学びの実現をめざす。

- ・学習規律を確立する。
- ・グループでの対話による学習を進める。
- ・学習の足跡となるように、ノート指導を充実させる。
- ・話す力、聞く力、書く力を身に付けさせる。
- ・モジュール学習でも、自ら学習課題を設定し、縦割り班で取り組む。

○高学年を中心に算数科で少人数授業を行い、単元の特性に応じた指導形態を工夫し、きめ細やかな指導を行う。

○教科学習での活用など授業での ICT 機器の活用を進め、授業の質の向上や子どもたちの多様な学びの実現をめざす。また、家庭での効果的な活用についても検討し、端末の日常的な持ち帰りの推進を図る。

○公開授業や授業参観に積極的に取り組み、教師相互の授業力の向上を図る。

○「教職員の ICT 活用指導力チェックリスト」や「情報活用能力チェックリスト」を活用しながら ICT 機器の効果的な活用を推進する。

○全国学力学習状況調査やみえスタディ・チェック、全国体力・運動能力・運動習慣等調査で成果や課題を分析し共有することにより、学力や体力向上に向けた対策が早期に実行できるよう取り組む。

○課題やめあてをもった問題解決学習や体験的な学習の機会をできるだけ取り入れ、「主体的・対話的で深い学び」を通して、生涯にわたって能動的に学び続けられる資質・能力を育む。

○効果的なモジュール学習（15 分間）の活用をさらに探る。

（２）学習ボランティアの活用

○コロナ禍のため停止していた学習・読み聞かせボランティアを再開する。

○ボランティアの様々な場面での活用を探り、充実を図る。

（３）補充学習の推進

○モジュール学習の内容と関連させ「学びっこタイム」では、低学年、高学年の縦割り班で、関わり合い・学び合いを通して学びに向かう意欲の向上を図る。

○サマースクールを実施し、基礎的な学習の確実な定着を目指す。

（４）家庭学習の定着

○10 分×学年の家庭学習の定着と、高学年の自主学習を推進する。

○全学年で、3 点セット（音読・漢字・計算）に取り組む。

○自主学習は発達段階に応じて、全学年で「自ら課題を見つけて解決できる」ことをめざして取り組む。

○週末（金曜日）には、書く力が身に付くように作文・日記に取り組む。

- 中学校区で協働して、家庭学習の推進に取り組む。
- 高学年は、月に1回プレミアムフライデーに、県作成のワークシート等に取り組む。

（５）キャリア教育

- 教科と関連させ系統立てた年間計画に沿って、夢工房やゲストティーチャー等の活用を図る。
- 地域の方をゲストティーチャーとする、地域に根差した学習に取り組む。
- 自然体験・環境教育・SDGs活動を推進する。

（６）読書活動の推進

- 「おすすめの本20冊（高学年は15冊）」の完読をめざす。
- 図書館利用を推進し、1～4年年間平均50冊以上、5・6年年間平均40冊以上の貸し出しをめざすとともに、家庭と協力し、読書習慣の定着を図り、相対的にスクリーンタイムを減らす。
- 巡回指導員の活用を図り、図書館を利用した授業を各学年で実施する。
- サーチ学習等での情報センターとしての図書館利用をめざす。

【 特別支援教育 】

- 特別支援教育コーディネーターを中心に、教職員、スクールカウンセラー等が連携し、支援が必要な子どもへのきめ細やかな支援を行う。
- 個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成を推進し、支援が必要な子どもへのとぎれのない支援を充実する。
- 校内委員会・校内支援会議を充実し、個の課題に応じた支援を充実する。
- 必要に応じて関係機関と連携した支援会議を開催する。

【 非認知能力の育成】

- お互いのよさや違いに気付き、認め合い、高め合う態度を育成し非認知能力の育成を図る。
- 非認知能力アンケートを定期的実施し、結果について中学校区で分析する。分析したことで掘んだ課題について解決する手立てを中学校区で検討し、実践に生かす。

【 人権教育 】

- 道徳科を中心に、各教科や総合的な学習の時間における様々な体験活動との関連を図り、豊かな感性をもち自律した子どもを育てる。
- 鈴峰中学校区内の学校や地域が連携し、6年生代表参加の人権フォーラムを開催する。
- 特別支援学級「ひまわり学級」に関する理解を、全校及び保護者、地域に対して進めていきたい。

【 生徒指導 】

- 気持ちのよいあいさつと、相手の気持ちを考えた優しい言葉遣いができるように児童会活動を通して働きかける。

- 「早寝・早起き・朝ごはん運動」に取り組み、基本的生活習慣の定着を図る。
- 学校のきまりの意味をよく考えさせ、自ら守ろうとする意欲を高め、全教職員による統一された指導を行う。
- 「わかる授業」・「いじめ・暴力を許さない」・「個に応じた指導と配慮」に力点を置き、新たな不登校を生まない魅力ある学校づくりを目指す。
- 教職員が児童理解を深め、受容・共感の姿勢で児童との関わりを深める。

【 健康、安全・安心の取組 】

- PTAや地域と連携して、登下校における子どもたちの安全を確保する。
- 関係機関と連携し、避難訓練、引き渡し訓練、防犯教室、交通安全教室等を実施する。
- 一斉下校、集会等で笛の携帯点検を行う。
- 保護者や地域との連携を深め、登下校の安全確認活動を推進する。
- 問題行動の未然防止に向け、「相談・連絡・報告」を徹底する。「常に先手を!!」また、問題行動の記録を残し、それを元にケース会議を開催し事例に学ぶ。

【 開かれた学校づくり 】

- 学校運営協議会を年6回開催し、保護者・地域・学校の連携と協働の下で学校経営を推進する。
- 運動会、森のまつり、児童集会、授業参観等を通して、保護者や地域の方々に学校の教育活動を公開する。
- 学校だより、学年・学級通信、保健・図書館だより等を通して、保護者や地域に情報発信する。
- 各地域行事での交流などを通して、地域との交流を深める。
- 学校・子ども・保護者・学校運営協議会等の自己評価・学校関係者評価を実施し、評価結果を公表し、学校経営の改善に活かす。
- 地域学習における地域人材の積極的な活用を推進する。

【 学校における働き改革 】

〈今年度の目標〉

A	① 1人当たりの月平均時間外労働	30 時間未満
	② 年 360 時間を超える時間外労働者数	0 人
	③ 月 45 時間を超える時間外労働者の延べ人数	0 人
B	1人当たりの年間休暇取得日数	22 日以上
C	① 定時退校日に定時に退校できた職員の割合	90%以上
	② 放課後に開催して 60 分以内に終了した会議の割合	80%以上
	③ 1人当たりの平均時間外在校等時間	30 時間以下

- 学校・教師が担う業務の明確化の視点から、業務を見直す。
- 目標とする退勤時刻の見える化を通して、「勤務時間」を意識した働き方を継続する。
- 「定時退校日」を設定（月に2回は必ず実施する）する。設定日に定時に退校する職員の割合 90%を実現し、教職員が心身ともにゆとりをもつことで、教材研究を深め、子ども一人ひとりに応じた指導の実現をめざす。